

・ディプロマ・ポリシーに特に強く関連するものは◎、関連するものは○を記入する。

科目名	ディプロマポリシー	【1. 知識・理解】	【2. 汎用的技能】	【3. 態度・志向性】	【4. 統合的な学習経験と創造的思考力】	科目の教育目標
専門教育科目						
医療における人間学	○	○	○	◎	○	生命、病気、および薬と関わる医療の担い手となることを自覚し、それにふさわしい行動・態度をとることができるようになるために、人との共感的態度を身につけ、信頼関係を醸成し、さらに生涯にわたってそれらを向上させる習慣を身につける。
薬と社会の探訪	○	◎	○	◎	◎	薬学部卒業生が活躍する現場の見聞等を通じ、薬と社会の関係性についての認識を深める。さらにグループワーク等を通じて社会の一員としての自身の進路や方向性について考察し、生涯にわたる学習意欲の向上を図る。
薬学英語1	○	○	◎	◎	○	This class includes a series of lecture-presentations and discussions intended to undergraduate 2nd grade students of Tokushima University. The purpose of this class is to increase the quality of writing skills in English, and to develop capacity to write articles/papers on their research works in future. This lecture intends to develop the skill of the students from the mechanics of basic sentence writing to the ability to construct a simple paragraph and improve a written text by proof reading. Making a paragraph will be the central theme of this course, however, it also applies to speaking and reading. So, this course will help you to gain confidence for communication in English by practicing and discussing in group. The class also includes some basic chemistry courses which is designed to make students aware of the differences between Japanese and English pronunciation of the words in chemistry.
薬学英語2	○	○	◎	◎	○	薬学を中心とした自然科学分野で必要とされる英語の基礎力を身につけるために、専門英語の基礎知識と技能を修得する。
英語プレゼン実践講座	○		◎	○		学術研究発表にむけて、英語による口頭発表に必要な基礎的技術と態度を修得する。発音と発表姿勢の改善を目的とした実践演習を含む。
学術論文作成法	○	○	◎	○	○	将来、創薬研究者として世界で活躍できるようになるために、自身の研究成果を学術論文にまとめるためのスキルを身につける。
研究体験演習	○	◎	○	○	○	薬学における様々な専門領域研究を体験し、研究スキルを身に付けるとともに、これから学修する専門科目の重要性を認識できるようになる。
キャリアバサデザイン講義	○			◎	◎	将来、どのような道(職務)に進んでいく可能性があるのか、その道(職務)の内容は具体的にどのようなものか、どうすればそのような道(職務)に進むことができるのかについて学習し、将来の進路をデザインするために必要な知識を修得する。また、進路をデザインする上での基本的な考え方、具体的な例と戦略、実践的な英語などを学び、デザインした自己の将来を実現するための知識と能力を修得する。
物理化学1	○	○				化学の基礎である原子分子の成り立ちと、それらの中で作用する化学結合、分子間力を理解並びに、基本的な無機化学の知識の習得を目的とする。
物理化学2	○	◎	○			物質の状態や変化について理解するために基本となる、熱力学、溶液化学、電気化学及び反応速度論を習得する。
分析化学1	○	◎	◎	○	○	分析化学の基本事項、各種化学反応と容量分析法、分離分析法、自動分析法および臨床分析技術について理解する。
分析化学2	○	◎	◎	○	○	分光分析法、電気分析法、核磁気共鳴スペクトル測定法、質量分析法、X線分析法および熱分析について理解する。
製剤学	○	○	○			製剤学は、製剤の物性や製剤化のプロセスを物理化学的な見地から考究する、薬学に独自の学問である。本講義においては、製剤の基礎となる物理製剤学、及び薬物送達システム(DDS)について基本的な知識の修得を目的とする。
創薬物理化学	○	◎	○			理論・計算法学およびケモ・バイオインフォマティクス等の情報化学は今日、研究室や実験室のレベルを超えて、製薬関連企業等においても需要が大きい基盤技術となっている。本講義では原子・電子レベルからの生体分子の活性・機能発現メカニズムの理解とそれに基づく論理的創薬の基礎を習得する。
分析化学実習	○	◎	◎	○	○	分析化学の理論を実験によって再確認するとともに、分析データの処理や解析方法を習得する。
物理化学実習	○	◎	○		○	物理化学1,2で学んだ理論に基づいて、論理的創薬の基礎と応用を習得する。具体的には、コンピュータを用いた種々の数値計算やシミュレーションを通して、創薬・医療の実際を体得する。
製剤学実習	○	○	◎	○	○	医薬品の製剤化技術や、製剤の品質評価に必要なとされる各種試験の測定原理及び技法を習得する。具体的には、固形製剤の調製と評価、及び各種製剤の物性測定などの実験・考察を通して、医薬品の製剤設計において基盤となる考え方を身につける。
有機化学1(炭化水素)	○	◎	○		○	有機化学は薬学の基礎となる重要な学問であり、有機化学を深く学ぶことは生命科学の多種多様な事象を理解するうえで必要不可欠である。本科目ではアルカン、アルケン、アルキンといった基本的有機化合物を取り上げ、有機化学を支配する統一的な基礎的概念を修得する。
有機化学2(求核置換反応)	○	○	○	○	○	人が生きること、病気になること、喜怒哀楽などの生命現象は有機化学反応によって引き起こされます。有機化学は生命にかかわる科学であり、病を治す薬を作るために、薬が何故効くのかを理解するために、まず有機化学を学習します。“何故、この有機化学反応は進行するのか? 逆方向の反応は何故起こらないのか?”判断できる力を身につけます。
有機化学3(不飽和化合物)	○	○				生体分子と有機物質が相互作用理解する上で、電子豊富なアルケンや芳香族化合物ならびにヘテロ原子を有する複素環化合物の特性やその反応性ならびに合成法を理解することは不可欠である。授業は、これらの基本構造、物理的性質、反応性について習得する。またこれまで学習した理論では説明できない新しい概念(軌道の相互作用)で進行する環状反応についても習得する。

・ディプロマ・ポリシーに特に強く関連するものは◎、関連するものは○を記入する。

科目名	ディプロマポリシー 主要授業科目	【1. 知識・理解】	【2. 汎用的技能】	【3. 態度・志向性】	【4. 統合的な学習 経験と創造的思考力】	科目の教育目標
		幅広い教養を身につけるとともに、薬を創る・使う分野に関する幅広い基礎知識と、Pharmacist-Scientistの基礎となる専門的知識を有し、医療現場を理解するとともに研究の重要性を理解している。	薬の専門家として、論理的に討議・説明できる表現力と語学力を有し、医療、科学、社会の発展・高度化、創薬科学関連分野の高度化に対応できる実践能力を修得している。	薬の専門家として、高い倫理観、豊かな人間性、専門知識・技術の自主的・継続的な学修を行う姿勢、柔軟な科学的思考とコミュニケーション能力を有する。	幅広い分野を不断に学習し、その知識を自らの専門領域と結びつけることにより、医療の進歩に対応できる課題発見能力・問題解決能力を修得し、未踏分野への開拓精神を維持向上させ、『インタラクティブ YAKUGAKUJIN』として薬学の発展に寄与できる。	
有機化学4(カルボニル)	○	○	○		○	生命現象や医薬品の作用を深く理解するために有機化学の知識が必須となる。本科目ではカルボニル基の化学を題材に分子の持つ不飽和結合と極性がその物理的・化学的性質に及ぼす影響を学び、分子に対する理解を深める。また、その性質を利用した基本的な合成反応に関する知識を習得する。
有機化学5(生体分子)	○	○			○	生体分子の機能と医薬品の作用を化学構造と関連づけて理解するために、それらに関する基本的知識を、生体分子の有機化学的側面から理解させる。
有機機器分析演習	○	○				有機化学において化合物の構造を確認、決定できることは必須である。基本的な化学物質の構造決定が出来るようになるために、代表的な機器分析法の基本的知識と、データ解析のための基本的技能を習得する。また、有機化合物の立体化学について基礎的な知識を得る。
生薬学	○	◎	○	○	◎	医薬品として用いられる動物・植物・鉱物由来生薬の基本的性質を理解するために、それらの基原、性状、含有成分とその生合成、品質評価、生産と流通、歴史的背景などについての基本的知識を修得する。本授業に関連する基本的技能は生薬学実習で修得する。
天然医薬資源学	○	◎	○	○	◎	医薬品開発における天然物の重要性と多様性を理解するために、自然界由来の医薬品シーズ(医薬品の種)などに関する基本的知識を修得する。
医薬品化学	○	◎	○		○	実際に上梓されている医薬品を題材とし、医薬品を創製するうえでの有機化学の役割について、特に分子設計および化学合成に焦点をあてて理解させる。
有機反応論	○	◎	○		○	これまでに有機化学の授業で学んできた反応を「選択性」、すなわち「様々な可能性がある中で何故その反応が進行するのか」という視点から学び直す。この学び直しのプロセスを通じて分子の性質についての理解を深めるとともに、より実践的な有機合成の知識を習得する。
有機合成論	○	◎	○	○	◎	医薬品の研究開発には、リード化合物の種々の変換反応が必要不可欠です。しかしながら、同じ官能基を導入したい場合でも、化合物(出発物質)の性質によって反応条件は全く異なります。多種多様な反応や反応条件を網羅的に覚えることは不可能ですが、反応の原理や化合物の性質を深く理解することで、望む変換反応に必要な反応条件を予測することが出来ます。本講義では、幾つかの重要な分子変換反応を題材とし、それらをより深く理解することで、望む分子変換法を立案出来る応用知識を修得します。
創薬科学	○	◎	◎			将来、創薬研究者として活躍するためには、薬物の分子設計と合成、さらには生体内においてそれがどのように作用するのかを理解する必要があります。本講義では、ヌクレオチドを例として創薬化学的な発想を習得する。また従来型の低分子創薬だけでなく、抗体医薬・核酸創薬・遺伝子治療など最先端の創薬手法(創薬モダリティ)について理解する。
創薬実践道場	○	◎	◎	◎	◎	医薬品の創出には、限られた専門領域の知識のみではなく幅広い領域の統合的な理解が必要である。本演習では仮想企業演習を通じて、講義で理解した様々な分野の専門知識をいかに統合して、新薬を生み出すかについて習得する。
創製薬科学入門	○	◎	◎	◎	◎	医薬品開発における各学問分野の重要性を理解し、医薬品開発に参画するための素養を身に付ける。
有機化学実習	○	◎	◎	◎	◎	本実習では、有機化合物をはじめとする各種試薬類の安全な取り扱い方の習得と、講義で学んだ物性や反応性の知識の定着を目的とする。
生薬学実習	○	◎	◎	○	○	本実習では生薬、並びに医療現場等で使用される漢方薬を適切に品質評価することができる知識と技能を修得することを目的とする。
細胞生物学	○	◎				生命現象を細胞レベル・分子レベルで理解できるようになるため、生命体の最小単位である細胞の成り立ちや生命現象を担う分子に関する基本的事項を修得する。
解剖生理学	○	◎	○	○	○	人体の正常構造を系統的に理解するために、人体を構成する器官の構造および機能などに関する基本的事項を修得する。
微生物学	○	◎	◎	○	◎	微生物と称される一連の生物(細菌、真菌、リケッチア、クラミジア、マイコプラズマ、ウイルス)の生活環ならびにそれを支える形態的・機能的特徴を学ぶことを通して、病原性が発揮されるメカニズムを理解する。
遺伝子生化学	○	◎	○	○	○	遺伝子は生命の設計図であり、その構造と機能を知ることは生命の理解に必須である。本講義の前半では、染色体DNAとRNAの構造と機能、および遺伝情報の発現制御機構を学び、後半では発展し続ける遺伝子工学の様々な技術と薬学研究への応用について学ぶ。
タンパク質科学	○	◎				生命現象を担う分子、特にタンパク質や酵素に関する基本的事項を修得する。医薬品の生体内での作用を化学的に理解できるようにするために医薬品とその標的となるタンパク質・酵素との反応に関する基本的事項を修得する。
代謝生化学	○	◎				生体エネルギーの産生、貯蔵、利用、およびこれらを支える糖質、脂質、タンパク質、核酸の代謝に関する基本的事項を修得する。
生体内シグナル概論	○	○		○	○	生体内のダイナミックな情報ネットワーク機構を物質や細胞レベルで理解するために、代表的な情報伝達物質や受容体の種類、細胞内シグナル伝達機構、遺伝子発現調節に関わる転写制御機構、作用発現機構などに関する基本的知識を修得する。
免疫と疾病	○	◎	○			免疫とは生体内に病原体などの非自己物質が侵入した場合や、がん細胞などの異常な細胞が生じた場合に、これらを認識するとともに排除、殺滅することにより、生体を疾病から保護するシステムを指す。その異常は重篤な疾病をもたらすし、正常な応答を回復させることで疾病の治療につながるため、その基礎と医療への応用についての理解を深める。
衛生薬学1(栄養)	○	◎	○	○	○	衛生薬学とは「薬学分野における、生命(を)衛(衛)るためのサイエンス」である。このことを理解させ、その重要性を教える。そのうち、衛生薬学1では、栄養、食品機能と食品衛生および食品の科学と安全性維持などを教授する。

・ディプロマ・ポリシーに特に強く関連するものは◎、関連するものは○を記入する。

科目名	ディプロマポリシー 主要授業科目	【1. 知識・理解】	【2. 汎用的技能】	【3. 態度・志向性】	【4. 統合的な学習経験と創造的思考力】	科目の教育目標
		幅広い教養を身につけるとともに、薬を創る・使う分野に関する幅広い基礎知識と、Pharmacist-Scientistの基礎となる専門的知識を有し、医療現場を理解するとともに研究の重要性を理解している。	薬の専門家として、論理的に討議・説明できる表現力と語学力を有し、医療、科学、社会の発展・高度化、創薬科学関連分野の高度化に対応できる実践能力を修得している。	薬の専門家として、高い倫理観、豊かな人間性、専門知識・技術の自主的姿勢、柔軟な科学的思考とコミュニケーション能力を有する。	幅広い分野を不断に学習し、その知識を自らの専門領域と結びつけることにより、医療の進歩に対応できる課題発見能力・問題解決能力を修得し、未踏分野への開拓精神を維持向上させ、『インタラクティブYAKUGAKUJIN』として薬学の発展に寄与できる。	
衛生薬学2(疾病)	○	◎	○	○	○	衛生薬学とは「薬学分野における、生命(衛)るためのサイエンス」である。医学(臨床医学)が病気の治療を目的としているのに対して、ここで教える保健衛生の分野は病気の予防と健康の増進を目的としており、疫学や保健統計、健康管理などもこれに含まれる。また、感染症や生活習慣病について解説し、それらの予防と対策について理解する。
環境薬学	○	◎	○	○	○	環境薬学の講義目的は、まず、人を取り巻く生活環境の変動が及ぼす影響、並びに、良好な生活環境の確保やその方策などを理解することである。また、現在、社会的に大きな関心を集めている環境汚染を中心とした諸問題について、その原因化学物質の発生機序、毒性、分析、除去対策や薬物乱用の健康への影響等を学習することも目的とする。
コアDDS講義	○	◎			○	徳島大学薬学部にて結集している様々な薬物送達システム(DDS)研究、特にDDSキャリアーを用いた研究について学び、自ら新しいDDSを考えることで、製薬会社等に就職した時に画期的なDDSを提案できるようになる。
生物化学実習	○	○	○	○	○	(1) 遺伝子・微生物 創薬研究に必須である「遺伝子操作」に関する基礎的な知識・技能を習得する。また、遺伝子工学を含む多岐の分野で利用される微生物の基本的性質を学び、微生物に関する知識と理解を深める。 (2) タンパク質・細胞 生命活動の担い手であるタンパク質、酵素について理解するために、その構造や性状についての基本的知識を修得し、それらを取り扱うための基本的技能を身につける。 (3) 動物・薬理 講義で学ぶ薬物に関する知識を、実際に手を動かす体験に基づく実験により深い学修と実験技術を修得する。薬物の投与・適用により生体あるいは抽出組織標本に起こる生理学的・生化学的な変化を観察し、これまでに修得した知識から、介在するメカニズムを推論する能力を身につける。また動物を使用するため、動物実験の基本理念である「3Rの原則」を正しく理解する。
衛生化学実習	○	○	◎	○	○	衛生化学は生命体の維持という観点に立ち基礎から応用に至るまでの広範囲な領域から成る学問分野である。しかも、近年の科学技術の進歩や産業構造と生活様式の変換により、その内容はさらに複雑化している。これらの領域における薬学生のための実習も多岐にわたるが、本実習では、これを学ぶ薬学部生がとまどうことがないように、その本質を理解できるような重点項目を選んであり、それらの実験法の手技を習得し、衛生化学的意義を理解することを目的とする。
基礎医療薬学	○	◎		○		医療人として社会的に求められる態度や姿勢、倫理、コミュニケーション等について理解する。また、薬学に関する基本用語を学修し、薬の生体内における動きと作用、および、医薬品の安全性や医薬品及び薬剤師に係る法律に関する基礎知識を修得する。
薬理学	○	○			◎	種々の薬物の薬理作用を理解するための基礎的段階として、生体の神経伝達機構について理解する。さらに、末梢神経系に作用する薬物の薬理作用、生理活性物質の作用機序、有害事象を学び、薬物が生理機能にどのような影響を与えているのかなどを理解する。またアクティブラーニングとして、理解度確認のための振り返りと、必要に応じて質疑応答を行う
薬物治療学1(循環器)	○	◎	◎	○	○	疾病に伴う症状と臨床検査値の変化などの確かな患者情報を取得し、患者個々に応じた薬の選択、用法・用量の設定および各々の医薬品の「使用上の注意」を考慮した適正な薬物治療に参画できるようになるために、薬物治療に関する基本的知識と技能を修得する。
薬物治療学2(消化器)	○	◎	○	○	○	医薬品を適正に使用するためには、薬効について知るだけでなく、個々の疾病に対する知識を身につけることが大切である。そこで本授業では、将来、適切な薬物治療に貢献できるようになるために、消化器系疾患、呼吸器・胸部疾患、代謝性疾患、およびそれらの治療に用いられる代表的な医薬品に関する基本的知識を修得する。
薬物治療学3(神経)	○	◎	○	○	○	将来、適切な薬物治療に貢献するために、脳を中心とした中枢神経系と末梢投射先である感覚器に起きる、様々な疾患の病型分類、病態生理学、診断基準、そして適切な薬物療法と注意すべき副作用について、説明出来ることを目標とする。また、薬物治療実施に必要な情報を、自ら収集するための基本的技能を身につけることを目的とする。
薬物治療学4(炎症)	○	◎	○	○	○	免疫・炎症・アレルギー、および骨・関節の疾患、泌尿器系、生殖器系の疾患に対する薬について、その薬理作用・有害事象(副作用)をそれぞれの器管・組織などの生理機能および病態と関連づけながら理解するとともに、それを生きた薬物療法について理解する。
薬物治療学5(がん)	○	◎	○	○	○	医薬品を適正に使用するためには、薬効について知るだけでなく、個々の疾病に対する知識を身につけることが大切である。そこで本授業では、将来、適切な薬物治療に貢献できるようになるために、「がん」に関係する基本的病態、および「がん」の部位別治療方法、特に薬物治療、そして補助方について基本的知識を修得する。
薬物治療学6(感染症)	○	◎	◎	○	○	病原微生物(細菌、ウイルス、真菌、原虫)に作用する医薬品の薬理および疾患の病態・薬物治療に関する基本的知識を修得し、治療に必要な情報収集・解析および医薬品の適正使用に関する基本的事項を身につける。
漢方薬学	○	◎	◎	○	◎	漢方の考え方、疾患概念の基礎について学習するとともに、代表的漢方処方への適応を、構成生薬の薬能から解釈出来るための基礎的知識を修得する。また治療に用いる場合の注意事項や、副作用に関する基本的事項など、医療現場でも役立つ知識と技能を修得する。

・ディプロマ・ポリシーに特に強く関連するものは◎、関連するものは○を記入する。

科目名	ディプロマポリシー 主要授業科目	【1. 知識・理解】	【2. 汎用的技能】	【3. 態度・志向性】	【4. 統合的な学習経験と創造的思考力】	科目の教育目標
		幅広い教養を身につけるとともに、薬を創る・使う分野に関する幅広い基礎知識と、Pharmacist-Scientistの基礎となる専門的知識を有し、医療現場を理解するとともに研究の重要性を理解している。	薬の専門家として、論理的に討議・説明できる表現力と語学力を有し、医療、科学、社会の発展・高度化、創薬科学関連分野の高度化に対応できる実践能力を修得している。	薬の専門家として、高い倫理観、豊かな人間性、専門知識・技術の自主的・継続的な学修を行う姿勢、柔軟な科学的思考とコミュニケーション能力を有する。	幅広い分野を不断に学習し、その知識を自らの専門領域と結びつけることにより、医療の進歩に対応できる課題発見能力・問題解決能力を修得し、未踏分野への開拓精神を維持向上させ、『インタラクティブYAKUGAKUJIN』として薬学の発展に寄与できる。	
医薬品情報学	○	◎	◎	◎	◎	医薬品の適正使用に必要な医薬品情報を理解し、正しく取り扱うことができるようになるために、医薬品情報の収集、評価、加工、提供、管理に関する基本的知識を修得する。また、個々の患者への適正な薬物治療に貢献できるようになるために、患者からの情報の収集、評価に必要な基本的知識を修得する。さらに、医療における医薬品のリスクを回避できるようにするために、有害事象、薬害、薬物乱用に関する事項を習得する。本授業に関連する基本的技能・態度は実務実習事前学習および病院・薬局実務実習で修得する。
医薬品情報解析学	○	◎	◎	○	◎	医薬品情報に関するEBMの実践、生物統計ならびに臨床研究デザイン・解析に関する基本的事項を修得する。また、社会保障制度のもとで提供される医療と福祉について、医療経済の現状と課題を認識するとともに、薬剤師が担う役割とその意義を理解する。さらに、医薬品による各臓器における代表的な副作用疾患について、推定される原因医薬品、身体所見、検査所見および対処方法を習得する。
臨床薬物動態学	○	◎	◎	○	◎	医薬品の効果や副作用には著しい個体差が認められることがあることから、患者個々に応じた投与計画を立案できるようにするために必要な基本的知識を修得する。
薬剤学1	○	◎	○	◎		薬物の生体内運命を理解するために、吸収、分布、代謝、排泄の各過程に関する基本的事項を修得する。また、各投与経路（経口、経皮、注射など）毎に異なる薬物の体内動態について、知見を深める。
薬剤学2	○	○	◎	○	◎	薬物の効果や副作用を体内動態から定量的に理解できるようになるために、薬物動態の速度論的解析に関する基礎的知識と技能を修得する。また、薬物動態の速度論的解析の有用性を紹介するとともに、種々の解析法についても解説する。
社会薬学	○	◎	◎	◎	○	社会において薬剤師が果たすべき責任、義務等を正しく理解し、医療の担い手としての倫理規範を身につけるとともに、医薬品医療機器等法（医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律）、薬剤師法、医療法などの薬事・医療関係法規や社会保険・医療保険などの社会保障制度のしくみ、薬剤経済など薬局業務に関する基本的知識を修得する。 また、科学技術の成果物である医薬品を最適な形で社会に適合させる（適正に使用する）という点で、薬学部出身者の従事するほとんどの業務がレギュラトリーサイエンス（RS）の概念に基づき遂行されている。本講義においては、理解しておくべきRSに関する基本的な知識の修得を目的とする。
地域薬局学	○	◎	○	◎	◎	地域薬局のあり方と業務を理解するために薬局の役割や業務内容、医薬分業の意義、在宅医療、セルフメディケーションなどに関する基本的知識とそれらを活用するための基本的態度を修得する。
応用医療薬学	○			◎	◎	看護の対象となる人々のためのケアシステムについて理解する。
疾病学1		◎	○	○	○	血液学、神経学、内分泌代謝学を総論と各論にわけて教授する。目標はそれぞれの分野の基本的知識の修得である。
疾病学2		◎	○	○	○	消化器および循環器疾患は内科学のなかでも特に頻度の高い領域である。本講義においてはそれらの基礎・臨床的な考え方や知識について教育する。また、消化器・循環器疾患のなかで歯科領域と強く関連した臨床的知識についても理解を深める。
疾病学3		◎	○	○	○	呼吸器病学、感染症学、膠原病学、アレルギー学について総論と各論を教授する。目標はこれら疾患の基礎的知識の習得と理解を図ることである。
チーム医療入門	○	◎	○	◎	◎	チーム医療に関する講義や現場医療者の経験談等を通して、高度医療薬剤師に必要な基本的知識と技能を修得する。また、グループワーク等を通じて高度医療薬剤師に必要な思考力を身に付ける。
地域医療入門	○	◎	○	◎	◎	地域医療に関する講義や現場医療者の経験談等を通して、地域医療薬剤師に必要な基本的知識と技能を修得する。また、グループワーク等を通じて地域医療薬剤師に必要な思考力を身に付ける。
先端臨床研究入門	○	◎	◎	○	◎	臨床現場で薬学研究者として活躍できるようになるために、臨床研究に関する基本的知識と技能を習得する。また、経験談やアンケート調査等によるグループワークを通じて臨床研究の基本的スキルを身につける。
薬剤学実習	○	○	◎	○	◎	薬物の吸収・分布・代謝・排泄等の体内動態を測定し、解析する技能を習得する。また、これらの体内動態を制御するドラッグデリバリーシステムの基本的な方法についても実際に経験する。
演習1	○	◎	○	◎	◎	専門的な知識、技能はもとより豊かな人間性と高い生命倫理観を持った医療人としての薬剤師を目指すために、大学の中だけでなく能動的に集団研修、自己研修を重ねて自主的に問題を発見し、解決する能力を身につけることを目的とする。
薬物療法マネジメント入門	○	◎	◎	○	◎	模擬症例で設定された課題を薬学的視点から検討することで、薬剤師として身につけておくべき基本的な臨床思考プロセスを修得する。
高度医療アドバンスド演習	○	◎	◎	◎	◎	ICT・ビッグデータ解析や臨床試験・治験・知的財産等に関する基本的知識や技能を修得する。また、高度医療体験や他職種連携に重点を置いた演習などを通して、高度医療に携わる薬剤師に必要な発展的スキルと態度を身に付ける。
地域医療アドバンスド演習	○	◎	◎	◎	◎	ICT・ビッグデータ解析や臨床試験・治験・知的財産等に関する基本的知識や技能を修得する。また、在宅医療やDMAT体験、他職種連携に重点を置いた演習などを通して、地域医療に携わる薬剤師に必要な発展的スキルと態度を身に付ける。

薬学部 薬学科

・ディプロマ・ポリシーに特に強く関連するものは◎、関連するものは○を記入する。

科目名	ディプロマポリシー 主要授業科目	【1. 知識・理解】	【2. 汎用的技能】	【3. 態度・志向性】	【4. 統合的な学習経験と創造的思考力】	科目の教育目標
		幅広い教養を身につけるとともに、薬を創る・使う分野に関する幅広い基礎知識と、Pharmacist-Scientistの基礎となる専門的知識を有し、医療現場を理解するとともに研究の重要性を理解している。	薬の専門家として、論理的に討議・説明できる表現力と語学力を有し、医療、科学、社会の発展・高度化、創薬科学関連分野の高度化に対応できる実践能力を修得している。	薬の専門家として、高い倫理観、豊かな人間性、専門知識・技術の自主的・継続的な学修を行う姿勢、柔軟な科学的思考とコミュニケーション能力を有する。	幅広い分野を不断に学習し、その知識を自らの専門領域と結びつけることにより、医療の進歩に対応できる課題発見能力・問題解決能力を修得し、未踏分野への開拓精神を維持向上させ、『インタラクティブ YAKUGAKUJIN』として薬学の発展に寄与できる。	
実務実習事前学習	○	◎	◎	◎	◎	卒業後、医療、健康保険事業に参画できるようになるために、病院実務実習・薬局実務実習に先立って、大学内で調剤、患者対応と服薬指導、処方設計などの薬剤師職務に必要な基本的知識、技能、態度を修得する。
医療薬学・病院実務実習	○	◎	◎	◎	◎	病院薬剤師の社会的役割と責任を理解し、チーム医療に参画できるようになるために、調剤、製剤、病棟業務などの実践を通して病院薬剤師に求められる基本的な知識、技能、態度を修得する。
医療薬学・薬局実務実習	○	◎	◎	◎	◎	薬局薬剤師の社会的役割と責任を理解し、地域医療に参画できるようになるために、保険調剤、医薬品などの供給・管理、情報提供、健康相談、在宅医療業務などの実践を通して薬局薬剤師に求められる基本的な知識、技能、態度を修得する。
卒業研究1	○	◎	◎	◎	◎	薬学の知識を総合的に理解し、医療社会に貢献するために、研究課題を通して、新しい知見を発見し、科学的根拠に基づいて問題点を解決する能力を修得し、それを生涯にわたって高め続ける態度を養う。
卒業研究2	○	◎	◎	◎	◎	
卒業研究3	○	◎	◎	◎	◎	
卒業研究4	○	◎	◎	◎	◎	